

市史編さんだより



(62)

多磨全生園の史料

保存に取り組む

青葉町一帯にひろがる大きな緑のなかにある国立療養所多磨全生園には、現在約500名のハンセン病元患者の方が入園されています。1909年(明治42年)の全生病院設立以来、90年余の歴史があります。その全生園史の一端は、すでに創立70周年史『俱会一処』として入園者自身によって著されています。この本で用いられたものも含め、園内には全生園とそこに生きた人びとに関わる様々な史料が残されており、入園者自

治会図書館や同敷地内にある高松宮記念ハンセン病資料館に収められています。なお、市では一昨年『東村山市史10資料編近代2』を刊行し、全生園関係史料の一部を収録しています。

市史編さん係では、昨夏から近代部会を中心に園内の史料調査・保存の取り組みを始め、先日、自治会図書館所蔵の主要な史料の自録化を終えたところです。長年ハンセン病史料の保存と活用に関連されている図書館主任の山下道輔さんと歴史学専攻の大学生らの協力を得て、ダンボール箱や本棚に詰められた史料を1点ずつパソコンに打ち込

んでいきました。図書・雑誌・綴類など、ダンボール箱で100箱以上、本棚に整理したものも含めるとおよそ2万点にものぼる膨大なものとなりました。

特に目を引いたのは、「患者入退院二関スル書類」「私宅療養患者調」「療患者徴兵検査関係書類」「厚生省往復文書綴」など、設立年以降の患者に対する強制収容隔離政策の実態を裏付ける貴重な史料の数々でした。こうした綴類以外にも、入園者が著し収集した俳句・短歌関係の図書、1950年代以降全国的に展開する患者運動関係の書類、様々な宗教関係の冊子、園内分校の文集、自治会誌など、入園者の生活史にせまる史料群が残されています。とくに入園者であった故光岡良二さ

ん所蔵書籍の存在は、ひとりの入園者からみたハンセン病史、さらには患者思想史への問いかけであるように感じました。

最近、「らい予防法」廃止や国家賠償訴訟・判決などであらためてハンセン病が注目されました。そうしたなかで入園者の平均年齢は約75歳となり、ハンセン病療養所は近い将来「終焉」を迎えようとしています。だからこそ史料を保存し、散逸しないための取り組みと方法の検討が必要となっています。今まで疎外され埋没してきたハンセン病史の解明と関連史料保存への取り組みは、今、ようやく始まったところです。

(近代担当 江連恭弘)